
別世界。

五月雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別世界。

【Nコード】

N4159X

【作者名】

五月雨

【あらすじ】

引きこもりの少女が出会った2次元の友達、〈1. 1秒!〉
いちいち!という男は、仲間がいる。私はいない。いちいち!には、別世界がある。私には・・・なにがあるの?

「たった一日では何も変わらなくて、自分で変えようとするばかりと何かが変わってくるものだよ」

別の世界に居るようで、同じ大地を踏んで生きてるんだ。

シルバーマーメイド。**(前書き)**

私にはなにかあるのだろうか。

シルバーマーメイド。

ある平日の朝のこと。

でも、とくにいつもと変わらない朝です。

生ぬるい風の吹き抜ける窓からは、かすかに夏の始まりが顔を出す。暑苦しくまとわり付くパジャマから、いつもの部屋着に着替える。

私を見てみぬフリをして、通り過ぎてゆく時間。

窓を閉め、カーテンを閉めた。

暗い部屋。

こんな私だって、居場所はあるんだ。

カチッ・・・

パソコンの電源に軽く力を込めるだけで、ほら。

私の世界は広がるんだ。

どのルームに行っても、「銀色人魚」(私)をたたえ、受け入れてくれるみんな。

この世界ではこんな、空気のように、空気みたいに必要とされない私だけ。

あっち側では、世界一の戦士なんだから。

最高まで上げたレベル。

そんなやつうじゃうじゃ居るけれど、課金という強い味方と、このテクニク。

どんなボス戦も、私が居れば誰一人死なないで突破できる。

腕についている傷は、今までの闘いの証。

軽やかにキーボードをたく指は、傷ひとつ無い青白さ。

日光をあびて華麗に舞う戦士。

締め切った窓からは、日光は差し込まない。

ただ唯一の敵は、ストーリー最後のボス。どうしても仲間の補助が

必要だ。

私の敵は、空腹と生理現象と時間。ご飯を食べないとめまいがするし、いちどだけ膀胱炎になった事もある。時間は何も言わずに通り過ぎていく。声をかけることができたなら、いつまでも引き止めておきたいものだ。

舞い込んできた依頼を次々とこなす、その姿はまるで獣。降り出した雨、そんなものに気にしない。

チャットルームに戻ると、そこには見た事の無い新顔が一人、何も言わずに突っ立っていた。

時々、妙なアクションをしているから、不思議に思っていたが、そのままチャットをはじめた。

「あ、マーメイドさん！乙です！」

「あ、こんちゃ^^乙です」

「こん^^」 「こんです」

「こん^^」

「乙」「こん^^」 「乙でーす」

すると、そこに立っていた新顔が、「kon」と発して、

「あ、すいません」「まちが」「いました」

と、途切れ途切れ言うのだった。

「いえいえ（＊ω＊） 良くある間違いですよ！」

と、すばやくフォロー。

「まーさんヤッサシー！」 「まーさんの嫁になりたいです！」

「ネカマですいません！」 「まーさんはオレの嫁」

「まーさんラヴ！」

などと、褒め称えてくれる。

「いやいやWWホントにアルアルでしょ今のWW」

「有難うございます」

「いえいえWW」

「あの、ところで、一緒にパーティーとか、組んでくれませんか・

$$\begin{array}{c} \bullet \\ \bullet \\ ? \\ \perp \end{array}$$

「あはは W W いいですよお ♪」

「
」
○
「
」
○
w
w
「
」
○
「
」
○

「（一。、し）すっぱー」 「梅干ちゃん」 「w w w w w w w w」

「W連射砲!ズギューン!!
(; > D <)
ノ || W
W
W
W
W
W
W」

[illegible]

デュクシ！」

「W
W
W
W
くっ
そ
吹いた
W
W」

「う
けるー
W
W」

「6レベ? 7までいってない?」

「あ、すいません、まだ・・・」

「じゃあ、6のボスイコーゼ☆サポートだけでヨロ氏」

「はい、じゃあ回復いっぱい持って行きますねー」

「ヨロでっす、じゃあGO！」

「てらー」「てらっさー」「いてらー」

そうしてボス戦に出かけた。

その新顔のユザネは、
 1. 1秒!、いちいち!さん。

私は、**〈銀色人魚〉**、シルバーマーメイド。

みんなからまーさんと呼び慕われている私。

私が通るとみんなが付いてくる。

どんどんレベルが上がるから。

いちいち！さんが通っても、誰一人気にしない。

レベルが低いから。

レベルと課金とテクニク。

そう、ソレだけが私の鎧。

硬く、現実という槍の雨から守り抜いてくれるんだ。

だから、そんな鎧を持たないいちいち！さんを、かわいそうに思っ

た。

でも、驚いたんだ。

無課金で弱くて、キーを打つのが下手な人。

そんなレッテルを貼って、自分が強いと満足していた。

でも

いちいち！さんは、私よりも、

仲間が多かった。

学校であった事、友達の冗談、先生の駄洒落。

どんなことも、本当に楽しそうに話すいちいち！さんは、男だそう
だ。

私とは、何もかも逆なんだなあ、なんて思った。

彼は、こんな事を言った。

「仲間なんて、たくさんでもすくなくても同じですよ。いない、と
は違いますけどね。」

私は、すぐに返事はできなかった。

仲間なんて・・・

「仲間って、いいですよね！！」
いない。

仲間なんて、いない・・・？

シルバーマーメイド。(後書き)

登場人物の詳細。

シルバーマーメイド
銀色人魚

本名…伊藤 いとう 桜来 さくら

性別…女

年齢…中学2年

趣味…ネットサーフィンなど

性格…暗いわけではないけど、人見知り

家族構成…母親、自分

色々…小額6年のとき両親が離婚、兄弟の弟と兄と離れ離れに。
そのせいでクラスから孤立し、今に至る。

元の苗字は、花園。

1. 1秒! (いちいち!)

本名…一 はじめ 太一 たいち

性別…男

年齢…中学2年

趣味…ネットサーフィン、読書

性格…明るい。気配り上手、聞き上手。

家族構成…母、父、妹、弟

色々…中一から、重い病気で入院している。一度両親が離婚。父が再婚。

具合のいいときには学校へ行く。顔は悪い方ではなく、さわやか系男子なので、

学校にはけっこう仲間がいる。元の苗字は花園。

二人は、兄弟です。

互いに悩みがあります。

いちいち！というのは、一太一、はじめたいち二回も一がつくから。

シルバーマーメイドというのは、厨二病でなんとなくつけた。
（小4のとき。）

次回、二人が再会。

再開と再会（前書き）

仲間、私には必要ないと思ってた。

再開と再会

仲間なんて・・・

「ですよーね！私も、仲間なしじゃ狩りできませんし！」

「ですよーね！僕も、まだまだレベル低いですし^^」
なにがですよーね！だ・・・

私には仲間なんて一人もないのに・・・

いちいち！さんは・・・仲間が・・・
すると、メールが届いた。

『冒険ファンタジー五月雨をご利用の皆様にお知らせです！』

・・・？これは、なんだろう。少し興味を引いた。
クリックした。

『冒険ファンタジー五月雨をご利用の皆様にお知らせです！』

ご利用人数が300万人を超えましたので、記念のOFF会を開きます！

沢山の皆様により、支えられている五月雨です。上級会を開きましょう！

ご希望の方は、人数をご記入の上返信してください。

なお、OFF会の経費は各自でお願いします。

OFF会の申請をされる方は、住所、氏名をご記入してください。
申請された肩に抽選で

五月雨限定アイテムをプレゼント！しちやいます！
皆さん、楽しんでください！』

・・・オフ会・・・

行ってみたいかもしれないなあ。

いつもは届かないメール。

上級会とは、レベルテクニク防具武器使い全て素晴らしいひとに

投票、50位までが決められるもの。

私は、4ヶ月まえに上級会入りし、一位を獲得した。

上級会の者のアイコンには、金色のリボンがつく。

一位のものには冠もつく。

一位の人には、月間ランキングのたびに賞金と商品が送られる。

賞金といっても、課金コイン300コイン、現実で言えば、100円程度。

商品は、防具のセット。

2ヶ月連続一位。

オフ会には、いちいち！さんを誘うことにした。

それと、常連の狩り仲間。

8人が集まった。

オフ会の費用よりもまず、見た目・・・

どうしよう。

手入れのなっていない黒髪。

可愛い服なんて持っていないし・・・

メイクだってしていない・・・

買いいものにでかけた。

可愛い服。

可愛いメイク道具。

髪の毛は、家で前髪を切った。

ツインテールにしてやれば可愛いんじゃないか？

髪を茶色に染めた。

準備が完璧に整った。

そして、オフ会当日。

目の前にいる人が誰なのか。

目の前で起こっていることはいい、

どういふ神の悪戯なのか・・・

弟・・・

双子の弟。

一、太一。

「たいちゃん・・・」

再開と再会（後書き）

再会。

再開した神のゲーム。

愛と愛と死（前書き）

再会

再開した神のゲーム

君が死ぬくらいなら

僕を選んでくれよ神様

僕の命はいらないから

君の命を救って・・・

愛と愛と死

「たいちゃん・・・？太一なの・・・？」

「え、あれ、さく？もしかして・・・？」

「たいちゃん！」

「さく！！！」

再会した私達。

他の皆から見れば、遠距離恋愛の恋人や古い友人にも見えただろう。でも、そんなのとは違う、決定的に違うものが、絆があった。

中一で入院したというのを聞いていたが、全然平気そうだ。

「いちいち！さんって、たいちゃんだったの？」

「え？ああ！そうそう！一太一だから、一が多くて。」

「一？婿に行ったってこと？」

「うーん・・・よくはわかんないけど、たぶん。お母さん元気？」

「まあね、うるさいくらいに。」

「あはは！かわってないねえ」

「あの・・・」

二人の声とはちがう、深く重いような大人びたこえが会話を途切れさせた。

オフ会に来るといっていた人たちだ。

「え、あ、すすすいません！」

たいちゃんが最初に謝る。これは昔から変わっていない。

「あー、オフ会のかたがたですか？まーさんこと、銀色人魚です。」

「マジ！？美少女ヤバス！！お会いできて光栄です！」

「うわおう！マジですか！予想とは違う可愛さマジ天使レベル」

「あのお・・・いちいち！です。こんにちは。」

「うわあ、激しくよそう通りですな。」

「リアル美少年萌え・・・触りてえ・・・」

「予想以下でも予想以上でもないですな。」

「ええ・・・そ、そうですか・・・？　なんかごめんなさい」

「謝った！謝罪男子萌え！」

「オレ、ネカマ気取りのスナイパー、シャドウです！」

「もふえです。女だと思ってたでしょ？男なんですよ実は。」

「じゃっかるびーむでーす。赤き鎧の男剣士きどりのJKです。」

「萌え萌えフィーバー！です！女ですいません！」

「ぎゃぎやるんです。はじめまして。」

「皆予想と違うねー、案外。」

「いちいちさんマジ萌える」

「まーさん！結婚を前提に付き合ってください！女ですけど！」
騒がしい人たちだ。

でも、私はもっと太一と一緒にいたい。

「あのー、まーさんしゃべってもいいですか？」

「okです。なんででしょう？」

「あのー・・・この子、私の弟なんです。生き別れの。」

「マジ！？うっそ！すっげ！アニメ並に良くできてるシーン」

「で、久しぶりなんで一緒に話したいなあー・・・なんて、思ったりして。」

「どうぞどうぞ！姉妹水入らず・・・いや、なんでもないでs」

「じゃあ、せっかくだし二人つきりでどっか行って来たらどうですか！？」

「禿同」「はげどーですー」「同意」

ネット用語を大声で叫ぶな！と、いいたいけど、おさえる。

「いいですか！？ありがとです！じゃあ、すいませんでしたー」

すたすたと、太一のをとり歩き出す。

いちおう、皆の名前と顔はいちちした。

さあ、何を話そう。

今までどうだった？

東京にはもうなれた？

友達できた？彼女できた？

お兄ちゃんは元気？お父さんもげんき？妹できたんでしょ？
ねえ、ねえ・・・

「ねえ、好きだよ。」

「え！？え、オレもそりゃ、好きだけど、なに急に」

「・・・変わってないね」

「そう？さくは美人になったねー」

「え！？うそ！そ、そう！？」

「あはは、かわいいね。変わらないんだね。」
・・・

途切れる会話。

路地裏に入ると、東京独特の排気ガスや人の匂いから離脱した。
パン屋さんのいいにおいが、鼻をくすぐった。

「たい、背伸びたね。追い越しちゃってるよ。」

「さくはちいさくても可愛いね。」

抱きしめられて、胸が苦しくなった。

太一の鼓動を感じた。

強くたたきつけるような鼓動。

私も同じだった。

暖かいぬくもりに包まれて

久しぶりに本当の安心感が心を抱きしめた。

ずっと昔に、同じことがあったっけ。

小学校に入学した次の日。

帰り道、犬にほえられて泣いてしまった私を抱きしめてくれた。

「大丈夫だよ」
って。

あの時の安心感が、また戻ってきたようだった。

・・・

あれ・・・？

なんだろう

鼓動が弱く早くなっ

て

あれ？

おかしいな

その場に倒れこむ太一。

寝ているだけじゃないみたいだった。

ひどく顔色が悪くて

苦しそうに胸を押さえている。

「か・・・はあ・・・く、きゅ・・・きゅう・・・」

「しゃべらなくていいよ。わかってる。」

ケータイで病院に連絡した。

「大丈夫、大丈夫」

弱弱しくにこりと微笑む君。

「すぐに来るはずだから、頑張っ・・・死なないで・・・」

笑えないよ・・・

まだ

いっぱい話したい事あるのに

まだ会って1時間も経ってないのに
連れて行かないでよ

引き離さないでよ
お願いだから・・・

3分後、救急車が来た。

くわしく事情を説明し、お母さんとお父さんが、
そしてもう一人の女の人が
病院に駆けつけた。

たくさんのひとにみまもられている太一。
息もできないくらい苦しそう。

口に鼻に腕に背中に
色々な管が入り込んだ体は
白くて軟らかくて暖かくて
天使みたいで

いとおしくて
離れたくなかった。

太一が死んじゃうなら、私を殺してよ。
一人残されたってどうしようもないわ。

生きるために一生懸命な太一を殺さないで。
生きていても意味のない私なら、殺してくれた方がいいから。
だから、太一を殺さないで。
お願いだから・・・

5時間後、太一の病室に行った。
もう夜になって暗い外。

明るくて暗い部屋。

ピッピッピッピッピッピッピッピッ．．．

不規則に鳴り響く機械音。

そして、太一が目を開ける。

「さく．．さ、よな、ら。元氣、でね．．待つて、るから．．

」

軽く手を振った後、安心したように目を瞑る。

ピーーーーーー．．．

時刻や日にちを細かく言う看護婦

手を合わせる。

今、私は

願う事をやめた。

「うつ．．うああ．．ああ．．

ああああ！ああああああ！！！！」

もう

生きたくない

太一

太一

太一．．

太一．．

死にたくないよお・
・
・

愛と愛と死（後書き）

この道の先に居るのが不幸だけなら、
私はここで旅をやめる。

この世に受けた生を憎み
愛して

死んでゆくでしょう。

d r e a m ? (前書き)

夢
・
・
?

dream?

飛び起きたベッドの上で、一人呼吸を整える。

何の夢だったのか、よく覚えてはいないけれど

涙を流していた。

汗をかいている。

ここまで感情がむき出しになったのは、いつぶりだろう・・・

今日も帰ってこないお母さん。

ご飯が、台所のテーブルにただ居座る。

それに手をつけず、出かける準備をした。

10時半集合。今は5時。

重く膨らむ財布を持ち、カバンに詰め込む。

いつもなら気づかないような、朝日の昇り始めが見えた。

少しだけ、楽しいような気分になった。

まるで、今からはずっと幸せが続くとでも言うように、太陽は淡く

雲にかすんでいる。

ドアノブを軽く押す。

「外」へ歩み出る。

すこしだけ足取りが軽かった。

いつもは通らない道、といより、見た事の無い道や

子供のころ一度か二度、通ったような道

朝日に照らされてあくびをする猫の居る墓地の前

まるで迎え入れてくれたように、首元を風がすり抜けた。

「・・・あ」

喜びに一人浸っていると

思わず声が出た。

通りの向こうに、一人の男の子が見えた。

まだ5時半なのに、人が居ると思わなかった。

赤いパーカー、黒いジーンズを着ていること以外は確認できないけれど、同じ年くらいと思われる。

その人は、私の進行方向に歩いていった。

・・・？

そんな出来事にも、興味を示してしまう。

普通の人にとって、これは日常、受け流してしまうような出来事に過ぎないだろう。

でも、私にとっては「私と母以外の人」を数年ぶりに見たわけで、感動して後を追ったのだ。

後を追った

わけではなく、ただ進行方向へ駆け出ただけだけれど。

風に触れられ、くすぐったそうに髪の毛を手でよける少年に見とれた。

遠くから見ただけだけれど

軟らかそうな繊細な肌

きれいに光るこげ茶色の髪の毛は、とてもしなやかで

透き通った目

その瞳と目が合った瞬間

体に走る衝撃

痛みやかゆみなどではないが、はつきり身震いと鳥肌が立つ瞬間を感じ取った。

「え・・・」

「・・・？」

少年は首をかしげ、こちらを見つめる。

彼の顔は記憶の中に強く強く残っている。

声や思い出なんて浮かんでくるほど新しいものは何一つ無いけれど、あの天使のような笑顔と

愛らしいしぐさ

私の手を握る感触

はつきりとまだ、私の中に残っていた。

駆け寄り、少しだけ距離を置いて話しかけた。

「た、太一？」

「・・・さく？」

心を締め上げていた鎖が、音を立てて崩れ落ちる。

その瞬間、私は

笑っていたと思う。

d r e a m ? (後書き)

夢。

リアルで、現実と見境の付かない夢。

現実にも非現実にも存在しない幸せで

『笑顔』は

心の中で目を覚ました。

再々会（前書き）

またあつたね

再々会

お互い、重なり合った視線。

電撃のような衝撃とともに、きおくが再生される。

「あ、え、うそ、うそ・・・」

言葉はうまく紡ぎだされない。

どうしたら、この緊張と動揺を抑えられる？

「さく！さく！？わああ！久しぶり！！」

走りよって、抱きついてくる。

きゅっと暖かいぬくもりに包まれる。

抱き返すと、あの時の幸せが甦ってくるのを感じた。

静けさが通り過ぎる道に、幸せが、太陽とともに上ってきた。

「太一・・・変わってないね・・・」

女の子もあこがれるくらい長いまつげ

整った顔立ち

細い線に縁取られた、白い肌

赤く紅く、艶めく唇

少し寝癖の付いた茶髪

可愛い瞳は、まるで琥珀のように透き通った茶色。

変わらないね。

「さく？ど、どうしたの？」

涙があふれ出ていた。

「え、あ、ああ。なんでもない。久しぶりだったから・・・」
愛に触れたのは。

久しぶりだったから。

お互いの心の中にあった、世の中への不信感
朝日の中へと、溶け込んでいった。
飛び立つすずめは見てみぬフリだけど

愛

確かにそこにあった。

再々会（後書き）

短かった・・・

でも次、期待しててください！

太一の過去が明らかに！

1, 1秒(前書き)

太一の過去が明らかに・・・
そして桜来の過去もついでにちろつと出てきます。
矛盾が生じないよう頑張ります。

1, 1秒

一太一

僕が生まれたのは、1月1日。

先に生まれたおねえちゃんが、桜来。

生まれて、産声を上げなかったさく。

お母さんは、痛みの中で心配と不安に襲われていたそうさ。

でも、徐々に容態は回復。

桜が好きなお母さんは、おねえちゃんに

『この子に、桜の咲く春がちゃんと来ますように』

と、思いを込めて名前をつけたそうさ。

僕が生まれた直後、お母さんは気を失ってしまった。

だから、さくよりも、生まれるのも名前が付くのも遅いんだ。

『太一』は、『ひとつの道を信じて生きる』とか、『強い精神を持った子』という意味らしい。

もともと病弱な未熟児の双子だったから、僕がちゃんと生まれて、安心したそうさ。

お兄ちゃんは、そのころもう小5だったから、あまり関心が無かったらしく、外にいた。

僕は生まれつきの喘息持ちだったから、小学生時代入院した事は何度もある。

そのたび、さくは支えてくれた。

小4で、親の夫婦喧嘩が耐えなくなり、兄弟三人で家出もした。

でも、僕の喘息の発作のせいで、仕方なく帰宅。たったの4時間の家出。

でもその日から夫婦喧嘩は勢いを増したようで、怖くなってさくと泣き合った。

大きくなったらさくのお嫁さんになる

それが小4までの夢だった。

小5で好きな人ができて、シスコンっぽさは無くなった。
でも

さくを突き放すようになった日から、一年。

親が離婚。

当然のように兄と父親に引取られて、さくと離れ離れに。

ストレスのせいもあってか、発作がひどくなった。

発作が頻繁に起こるようになって、病院にいった。

診断結果は、かるい肺結核。

2年もすれば治るらしいが、今はまだ入院中。

症状を抑える薬を飲んで、特別に外出許可をもらってきた。
そして今。

昔のさくの面影がありありと残る彼女。

さくは変わっていなかった。

でも、さくは

さくは引きこもりなのだろうか。

一日中ほとんど、ログインしている。

広告メールで始めたオンラインゲーム『五月雨』。

僕は入院中の暇な時間、勉強の合間にログインした。

そこにいた最強の戦士は、さくだった。

ずっと近くにいた。

気づかなかった。

君がこんなに近くにいたなんて。

君がこんなに遠かったなんて。

君がこんなに

愛しいなんて。

1, 1秒(後書き)

はい。

次に期待!ということですね。
すいませんでした。

桜来と銀色人魚（前書き）

今回は、桜来の過去。

太一のときの後一年の出来事。

桜来と銀色人魚

私の苗字が変わってから、私はひどいイジメにあった。

『ストップイジメ』のポスターが憎らしくて仕方なかった。ところどころ画鋏で引き裂かれたポスター。

描かれたキャラクターの澄み切った瞳と目が合った。

そのキャラクターの見つめる先に、本当に平和などあるのだろうか。不登校になってからは、太一や、兄、父の事が頭から離れなかった。30後半の父は、見た目よりずっと若くて、太一と兄は父似でかっこいい。

私は、母似で、母は見た目よりずっとふけていて40歳のようなが、まだ32歳だ。

私もいずれこうなるのかと思うと少し悲しくなる。

ずっとずっと、『さく』とよぶ声が、太一の声が、脳裏で再生されていた。

でも、その声もしだいに薄れ

現実の中にと淡く溶け込んでいった。

手放したものが、再び戻ってきた。

入院したと聞いたとき、また太一の笑顔が浮かんできたが、

「二度と会えないんだ」

はつきりと口に出してみて分かった。

もう一度なんて淡い期待を抱いていた。

その期待が消え、絶望に直面した時だ。

「太一・・・」

ずっと近くにいた。

近くて、遠くて。

顔も見えない世界で、手探りで出会った光のような喜び。

『ちよつとむかついたから。』

『ちよつとだけ、ちよつかい出したかったの。キモいから。』

『うざいから、こつち見ないでほしかった。』

『軽い気持でやった』

『もうやらない。ごめんね。』

その子たちの声が、脳を殴りつけるように響き渡った。

散々いじめておいて。

その言い草はなんだ。

許さない。

仲良くしようね。

一緒にいようね。

この傷だらけの体とココロに、何を満たせるといふのだ。

死のうかとも思った。

生きる意味を探した。

そのストーリーの結末はあっけなくて

あまりにも残酷で。

他人に頼る

一番やりたくない方法で、無理やり幕を閉じた私が嫌いだった。

でも、許す許さないではない。

喧嘩していたわけでもないんだから。

私が悪いわけでも

相手が悪いわけでも

ないんだから。

だから、

目をそらした。

そこにいた君。

今まで歩んだ道は、正しかったの？

違う道を選んでいたら、君とは会えなかったの？

ねえ教えてよ。

さくら…たいちⅡ1…1? (前書き)

人間は皆対等だ

嘘です。

みなさんは今、どんな格好をしているんでしょうかね。

綺麗な服? ダサい服?

いいえ。

服を着られない人だっているのを、知っているでしょう。
なのに、ソレを見ながら対等だなんて。

それと。

『一人一人の命の重さ』

これも、

やっぱり等しいとは言いきれないんじゃないですかね。

さくら…たいちⅡ1…1?

「たとえば、目の前に、あと2時間で死んでしまう病気の人が二人いるとする。

一人は、大親友。

もう一人は、みずしらずのおばあさん。

二人とも、苦しそうに助けて、助けてと呟いている。

その病気を治せる薬を、私は1つだけでもっている。

どっちを助きたい？

助けられるのは一人だけ。

命の重さは同じなんだよね。

なのに、おかしいな・・・

結局私は、親友を助けてしまうだろう。

でも、おばあさんが死んでしまう瞬間に後悔もするだろう。

どうしてだろうね。」

母の話を聞いて、二人は今までもずっと、考えてきた問題。

命。

それは尊くて、身近だ。

心。

それは、見えなくても自分自身だ。

『さくだったらどうするの?』

『私は、やっぱり大親友を助けるよ。』

『・・・僕も、そうかもしれない。』

『でも、おばあさんが二人だったら、どうするんだろうね。』

『えっ・・・それは、難しいね。じゃあ、若い方を助けるかなあ・・・』

『なんで?』

『えっ・・・この先に、生きていける年月がまだあるのに、死んじ

やうのはかわいそうだし・・・」

『どっちだって同じでしょ。生きている限り、死ぬ確率なんて同じなんだから。』

『・・・じゃあ、さくはどうなんだよ。』

『私は、多分同じ。若い方を助けると思う。一生後悔するのは、どっちでも同じなんだから。』

『ふーん。じゃあさ、僕と、おばあさんだったら？』

『たいちを助けると思う。じゃあ、私とおばあさんなら？』

『さくかな。あ、でも・・・でも、さくが死んじゃうなら僕も死ぬから、おばあさんかも・・・』

『それは、偽善だよ。』

『ぎぜん？』

『そう。自分を中心にして考えている。』

『・・・そうだね。』

『これに、答えはないと思うよ。』

毎日のように交わした会話。

私は、結局、どっちなんだろう。

たとえば、いじめっ子目線なら、わたしは見捨てられる方。

たとえば、先生なら、見捨てられる方。

たとえば、自分なら・・・

毎日、人を見るたび考えること。

どっちかな。

どっちも助けなくて、いつかの自分のためについていう人もいるんだろう。

そんな選択肢を考え出した日には、もうそばに太一はいなかった。

「どっちかな・・・」

口に出してみた。

「どっちなんだろうね。」

口に出して、太一も答えてくれた。

再会したその日に、交わした会話。

命って、何なんだろう。

生まれてくるのは、死ぬためなんだろうか。
生きて幸せになるためだろうか。

生まれてすぐに死ぬ子供だっている

生まれてから苦しむ人もいる

生まれない命だってある。

生きて幸せになるなんていうのは、とても、とても難しくて。
生きることすらままならなくて。

だけどいきて
生きて。

最後には、死ぬることが幸せなんだろうか。

不老不死ほど辛いものはない。

だけど、生まれられない命ほど辛いものはあるのか？
そんな疑問に答える人はきつと、だれもない。

責任を問われるのが嫌だから。

当たり前だろう。

自分でも、よく分からないことを答えて、間違っていれば恥をかく
のだから。

誰のせいで、こいつのせいで、あいつのせいで・・・

それもまた、恥だとは気が付かずにいるのだろうか。

太一と、そんな答えのない話をして一晩を過ごした。

太一と私は、対等の命なのだろうか。

生きて苦しんで、不幸な私。

生きて、苦しみに打ち勝つ幸せを持つ太一。

答えが出る頃に、私は何度生きて死んでいるのだろうか。

なんと、生まれてこられるだろうか。

流れ星に願う。

今度うまれてくるならば、別の世界に生んでほしい。

みんなの命が対等だと、目の前に真実として証明されている別世界に。

だれしもが幸せで、だれしもが不幸で。

そんな世界に、二人を生んでほしい。

だけどそれは

矛盾。

太一と私。

一対一の人間に生まれ、めぐり合えたなら。
それこそ

特別な幸せでしょう？

e n d

さくら…たいちⅡ1…1? (後書き)

幸せも不幸も何もない世界は幸せなのだろうか。

これは矛盾していて、誰かの疑問というよりも誰かの戯言。

幸せのない世界なのだから、幸せなんてなくて、

幸せだと思う瞬間を感じるものは存在しない。

目も、口も、耳も。体は存在しないことになる。

心だってなくて。

結局は、何もない。

曲がりくねって、答えのない迷路。

死ぬまでに解き明かすことは、結局ムリなのでしょうから、

わたしならこう考えます。

ない答えは、追求して作ってしまえば納得して死ねると。

自分さえ納得できればいいんですから、人間は。

この小説に込めた思いは、結局最後の章にしか現れていないと思いますが、みなさんも、こんなことを暇な時に考えてみたら、きっと

暇つぶしにはなると思いますよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4159x/>

別世界。

2011年12月3日22時54分発行